

ピコーラの声はクローディアには聞こえない¹

—— Toni Morrison の *The Bluest Eye* (1970)

における声の現象

遠藤 健一

『青い目がほしい』は、秋・冬・春・夏の4部構成で、各部は前半部が証人としての語り手＝登場人物クローディアによる一人称の語り、後半部は全知の語り手による三人称の語りから構成されている。前半部は、脇役クローディアによって、主人公ピコーラとの交友を含め直接見聞いたことが物語られている。後半部は、クローディアには知る由もないピコーラとピコーラの家族に纏わる物語が、ピコーラを含む登場人物たちの「心の中の声」も含めて物語られている。本講義では、(1) クローディアとピコーラの声の分析を試みる一方、(2) 合衆国の公立小学校初年次用の「国語(英語)読本」を模したエピグラフとしてのパラテキスト「ディックとジェーン」と物語テキスト本体との関係について検討する。

(1) クローディアとピコーラの声の現象

物語論の概念装置である「声」の範疇を参照枠として、クローディアの声とピコーラの声に限って分析を試みる。クローディアの回想の語りに

1 本講義を含む『青い目がほしい』の声の現象に関する議論全体については、『東北学院大学論集——英語英文学』第104号(2020)所載の拙論「『青い目がほしい』(1970)における声の現象——ピコーラの声はクローディアには聞こえない」を参照されたい。

ピコーラの声はクローディアには聞こえない

あって、成人の語り手クローディアによる物語言説、物語内容双方のレベルを対象にした「メタ物語的解説」と9歳の登場人物クローディアの声が成人の語り手クローディアの声に被る「自由間接思考」がとりわけ特徴的である。11歳の主人公ピコーラの声について言えば、そもそも口数の少ないピコーラの場合、一人称のクローディアの語りには「直接話法」による再現表象にはほぼ限られるが、三人称の全知の語りになると「自由直接思考」の使用によってより雄弁に心の声が再現表象される。クローディアにはピコーラの心の声が聞こえないことが、このような登場人物の声の再現表象化の仕組みに既に仕込まれてもいる。

クローディアの声の分析から分かることは、クローディア自身のピコーラの一連の悲劇的な出来事に対する罪責感の変化である。人種・階級・性差の差別の共同体の最深部に沈むピコーラをスケープゴートとして己の生をかりうじて確保する黒人の女たち。クローディアは差別されながら差別する黒人の女たちの一員たることを自責し苦悩する。自責し苦悩するという一点で他の黒人の女たちから差異化されてもいるクローディア。この小説の掉尾で、成人のピコーラが町外れでゴミをあさっているのを目撃する成人の語り手クローディアは、ピコーラが探しているものはピコーラの身に起きた謂れない不幸の「原因」ではないかと推測する。しかし、これはクローディアによるピコーラへの心理的投射であり、不条理な差別の「原因」を探しているのはピコーラではなく、むしろクローディア自身であることが明らかになる。

ピコーラの声の分析から分かることは、白人と同じ青い目を希求する孤独なピコーラの祈りの声とその過半を占める。狂気の裡に青い目を獲得してからは、世界でいちばん青い目への欲望にと変化する。しかし、その声はいずれも発話されない心の中の声、既に述べた「自由直接思考」の声で

ピコーラの声はクローディアには聞こえない

一貫している。従って、ゴミをあさるピコーラは、自分の目が世界でいちばん青いことを確認するために、自分の目よりも青い目だけを探していることになる。

謂れなき差別のなぜかを探しているクローディアには、やはり、ピコーラの声は聞こえていない。物語言説レベルにおける二人の声の再現表象化の仕組みばかりか物語内容レベルでも、語り手＝登場人物クローディアにはピコーラの声（心の声）は聞こえていない。

(2) パラテキスト「ディックとジェイン」と物語テキスト本体との関係

小学校国語読本「ディックとジェイン」はテキスト本体から区別されて冒頭部に配置されている。(a) ローマン体の印字と両端揃え、(b) 冒頭の1文字以外の大文字が小文字化され、句読点が削除され、単語間のスペースが維持されて印字、さらに、(c) 冒頭の1文字以外の大文字が小文字化され、単語間のスペースも削除され、連続する文字列だけの印字の都合3つが示されている。「ディックとジェイン」では、いわゆる想像の共同体である国民国家アメリカ合衆国の「国民」のモデル家庭として、白人中流階級の家庭が想定されている。さらに、(a)～(c)のグラフィック上の差異に基づくそれぞれのヴァリエーションについては、『青い目がほしい』に登場する典型的な三家庭のライフ・スタイル、すなわち、(a) ピコーラの母親が家事を放棄し、理想の使用人を実践している裕福な白人家庭フィッシャー家、(b) 貧しくても情愛に結ばれたクローディアとフリーダ姉妹の黒人家庭マックティア家、(c) 最下層に沈むピコーラの黒人家庭ブリードラヴ家のライフ・スタイルをそれぞれ表象していると解釈されてきた。

本講義では、ピコーラ、クローディアが統合学校の教室内で「ディック

ピコーラの声はクローディアには聞こえない

とジェイン」をそれぞれどのように音読していたかを想像することによって、(a)～(c)について、ピコーラ、クローディアのそれぞれの生きざまの軌跡の表象としても読み得るのではないかということをも提案する。

ピコーラの場合、ピコーラが学校で「ディックとジェイン」を音読した場合、ピコーラの心に浮かんだ光景とは、唯一ピコーラが経験している白人家庭であるフィッシャー家のものだったと思われる。母親ミセス・ブリードラヴをポーリーと呼ぶ「ピンクの服を着た、黄色い髪の小さな女の子」のいる家。「口のきけない」ピコーラの教室内での音読経験とは、自分の家の荒廃を背景に自分とは全く無縁のフィッシャー家の光景を心に浮かべながら、コーラル・リーディングの場合には声に出せず、せいぜい呟いただけかもしれない。ラウンドロビン・リーディングやインディヴィデュアル・リーディングでは教師から当てられるはずもない。「教師たちは決してピコーラを一瞥しようとせず、全員答えなければならない時に限って当てた」のだから。ピコーラの声をも拒む教師と同級生らの声にそれでも同調しようとして呟いたかもしれないピコーラの声は、声というよりはむしろ音。しかし、同調はかなわず、だからこそ青い目を獲得すべく、「ディックとジェイン」ではなく「アリスとジェリー」というもう一つの国語読本の世界を自ら創出せざるを得なかった。パラテキストのヴァリエーション(c)から(b)を経由しての(a)への移行は、従って、ピコーラの現実からの逃走の軌跡を、そして、青い目のシャーリー・テンブル的なものへの憧憬から空想への軌跡を視覚化していると読みことができるのではないか。しかし、その欲望は、ヴァリエーション(a)を超出し、「アリスとジェリー」の世界を空想し、挙句、「世界中でいちばんの青い目」への妄想にと自閉することになる。

次にクローディアの場合はどうか。1930年代後半、就学時前後のクロー

ディアについてはクローディア自身の証言がある。それは、端的にシャーリー・テンブル的なものへの憎悪であり、「青い目の、黄色い髪の、ピンク色の肌の人形」の解体を通しての生身のシャーリー・テンブルたちに向かう「剥き出しのサディズム」を抱懐してのものであったはずである。クローディアは、臆することなく教室内で、いずれの音読スタイルであれ、大きい声で参加したに違いない。しかし、クローディアの耳に届く声は自分の声も含めて、声から音に、場合によっては雑音として届いたのではないか。ヴァリエーション (a) は、クローディアにとっては、シャーリー・テンブル主演の映画の中の白人家庭のライフ・スタイル、例えば、『輝く瞳 (*Bright Eyes*)』(1934) のスマイス家だったかもしれない。しかし、そのようなシャーリー・テンブルのいる光景自体がクローディアにとっては憎悪の対象だったはずだ。記号表現の記号内容の意識への現前という記号学の顰みに倣えば、シャーリー・テンブル的な記号表現のことごとくは、混沌とした憎悪という記号内容としてクローディアの意識に現前する他なかった。パラテキスト「ディックとジェイン」のヴァリエーション (a) は、文法的機能の奪われた声というよりはむしろ音、あるいは、雑音を表象するヴァリエーション (c) となって、クローディアの意識に現前したように思われる。従って、パラテキスト「ディックとジェイン」のヴァリエーション (c) から (b) を経由しての (a) への移行は、差別の共同体としてのアメリカ社会に馴致化していく、あるいは、馴致化していかざるを得ないクローディアの「成長」の軌跡を視覚化したものと読めるのではないか。しかし、(a) を前に、なお、苦悩し、佇むクローディア。

そして、ピコーラの妄想への自閉の軌跡とクローディアの差別の共同体への馴致化の軌跡とが交わることはない。ピコーラの声は、やはり、クローディアには聞こることはなかったのである。